

## プラスチック製容器包装の環境配慮について、大学生と共に考える

2025年3月7日に、「プラっとサーチ for 大学生セミナー」と題したオンラインセミナーを実施しました。大学生や大学院生を対象とした本セミナーでは、教授らを含めて10~40代の13名が参加。プラスチック容器包装リサイクル推進協議会（以下、プラ推進協）の活動から『プラっとサーチ』の機能や活用法を通じて、環境配慮の取組みについての理解を深めました。当日の様様をレポートします。

### 身近な製品のプラスチック製容器包装の環境配慮を知る

冒頭、本事業のプロジェクトリーダーから本事業の趣旨を踏まえた挨拶からセミナーはスタートしました。プラ推進協では、2023年末に加盟企業や団体の製品のプラスチック製容器包装において、3Rやリニューアブルなど、どのような環境配慮がされているかをデータベース化した検索システム『プラっとサーチ』を開発しました。消費者に、プラ推進協と『プラっとサーチ』にもっと興味を持っていただき、理解していただくため、今回のようなセミナーをはじめとした啓発活動を積極的に行っています。

今回セミナーには「プラっと探検隊」のメンバーも参加しており、参加企業の思いと共に各人の自己紹介がありました。そして、セミナー参加者に向けて、「プラっと探検隊」メンバーである日清食品ホールディングスの日下さんが、「プラっと探検隊」の取組みと、『プラっとサーチ』の紹介を行いました。

### 『プラっと探検隊』とは

「プラっと探検隊」はTOPPAN(株)、日清食品ホールディングス、マルハニチロ(株)、雪印メグミルク(株)、ライオン(株)、大日本印刷(株)、サントリーホールディングス(株)の若手社員によって構成された啓発活動グループです。加盟企業・団体から応募いただきました。

2024年度の農水省補助事業として、プラスチック製容器包装の環境配慮や資源循環の認知・理解を促進し、消費者の行動変容を促す「自分ごと化」を推進するために活動しています。

**プラっと探検隊とは**

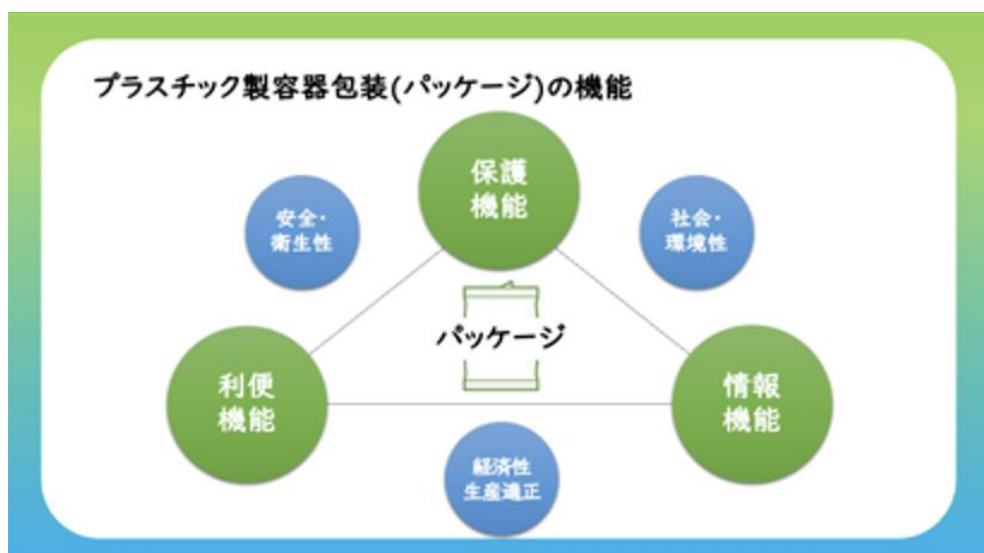
- ・プラスチック製の食品容器包装の環境配慮や資源循環の認知・理解を促進し、消費行動の変容を促す「自分ごと化」を推進するために組織された啓発グループ
- ・プラ推進協の会員企業の若手社員で構成

**プラっと探検隊参画企業**

山崎製パン(株)	ライオン(株)	ヤマザキ	NISSIN	LION
日清食品ホールディングス	雪印メグミルク(株)	MARUHA NICHIRO	雪印メグミルク	
マルハニチロ(株)	TOPPAN(株)	SUNTORY	TOPPAN	DNP
サントリーホールディングス(株)	大日本印刷(株)			

## プラスチック製容器包装の環境問題

原油からさまざまな形状のプラスチック製容器包装が製造される過程についても説明。プラスチック製容器包装には、製品を守る「保護機能」、消費者に情報を伝える「情報機能」、そして中の食品を食べやすくする「利便機能」という大きく分けて 3 つの機能があると同時に、環境に対して大きな課題もあることが示されました。

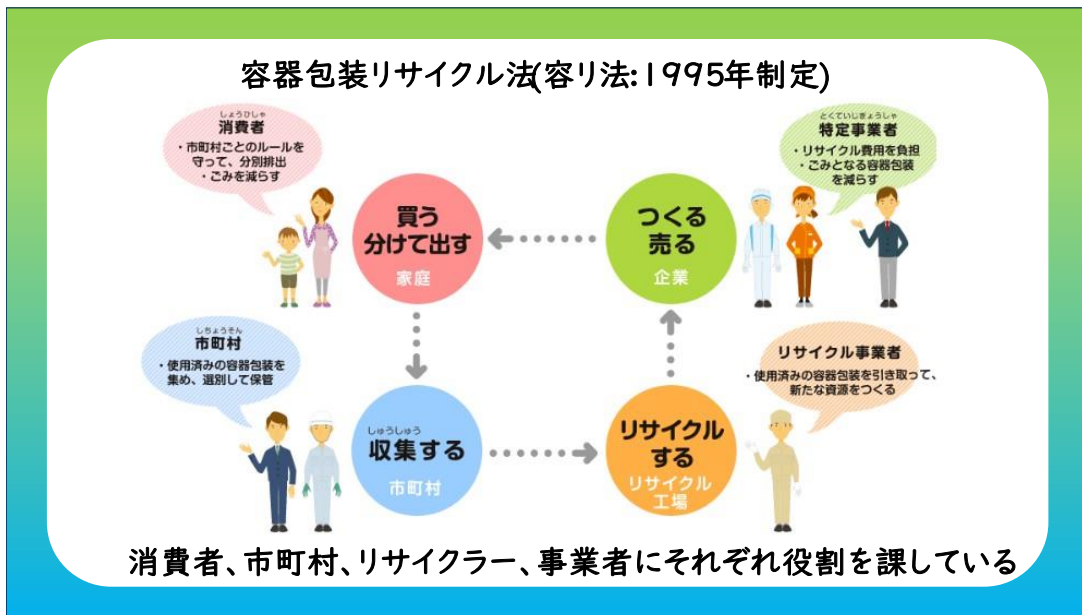


## 容器包装リサイクル法

昨今、プラスチック製容器包装は海洋汚染をはじめ様々な環境問題の解決が課題になっています。日本では 1995 年に容器包装リサイクル法が制定され、家庭から排出される容器包装についてはリサイクル制度を構築されました。消費者は市町村ごとのルールを守ってゴミを分別して排出、あるいはゴミそのものを減らす役割が

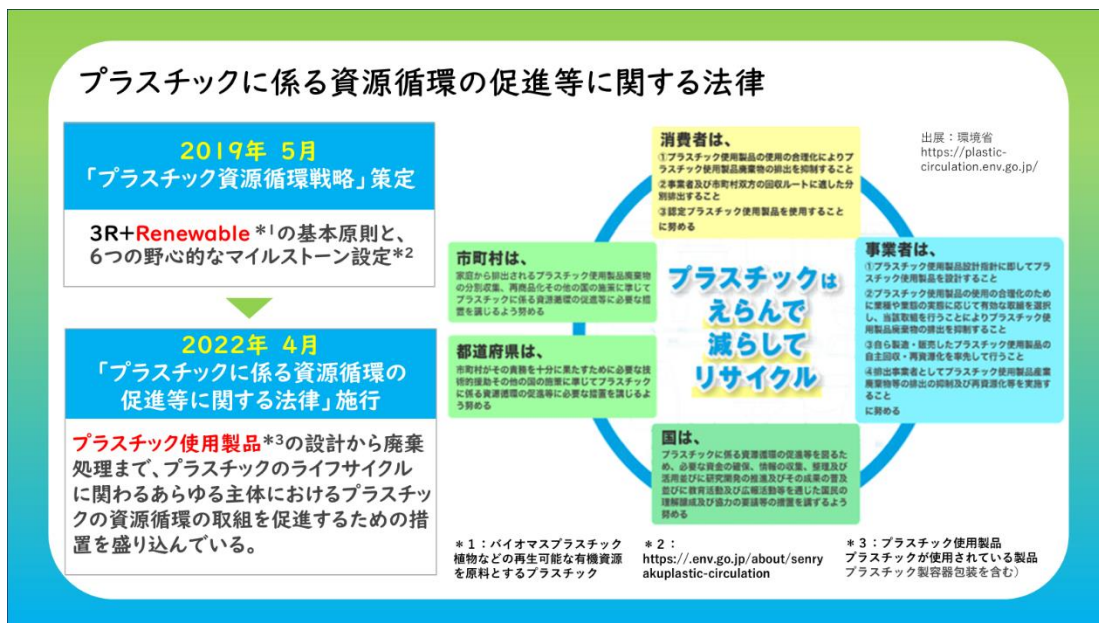


があります。市町村は使用済みのパッケージを集めて選別して保管し、リサイクル工場は使用済みのパッケージを引き取って新たな資源を作る役割を担っています。そして企業は、リサイクル費用の負担や、容器包装を減らす役割が課せられています。



## プラスチック製容器包装の環境配慮設計 ～ 3R+Renewable

さらに、2022年4月に施行された「プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律」の説明や、日本で1年間に約400万トンものパッケージが捨てられている現状、事業者にとってプラスチック使用量の削減や環境配慮の設計が大きな課題となっていることが改めて示されました。



環境配慮設計の基本原則である「3R（リデュース・リユース・リサイクル）+リニューアブル」を事例とともに解説。身近な製品での環境配慮設計については、『プラっとサーチ』を使えば消費者が詳しく簡単に知ることができると、その有用性が紹介されました。

さらに、『プラっとサーチ』を実際に操作してもらいながら、検索方法やサイトのトピックスに掲載されている「2008年からの事例数や環境配慮設計の施策の経時変化の解析」の紹介もありました。「プラスチック資源循環戦略」が策定された2019年以降、事例数は増加するとともに、Renewableの施策事例の割合も増えています。

## SNS活用や教育展開への提案などが相次ぐ活発な意見交換

質疑応答や議論が始まると、参加者からは「自社の最新の取組みを企業同士が連携して『プラっとサーチ』という形で反映していることに驚いた。消費者にとっても、プラ推進協や企業がどんなふうに頑張っているのかをデータベースとしてまとめていることに良い印象を受けたので、もっとアピールできると魅力的になる」「大学院でプラスチックとは違う材質の研究をしており、プラスチックについていろいろな話を聞いたのが非常にありがたかった」といった感想の声が上がりました。

また、ある参加者は「プラっと探検隊」とプラ推進協がXのSNSアカウントを開設したことに注目し、SNSで環境意識を身近に感じられる取組みを評価。これを受けて、ほかの参加者からも「若者向けの環境意識の醸成という意味では、若者の多くは短尺動画SNSのTikTokを使っている。Xの情報は自分の興味に偏りがちだが、広い範囲に情報を伝えるためにはTikTokのほうが有効性が高いのではないかと、フィルターバブルを懸念しつつより効果的なSNS活用についての提案もありました。

そのほか、参加者からは出前授業が小学校だけを対象としている点について質問が投げかけられました。小学生への啓蒙活動は、学校で学んだことを家に持ち帰って、保護者にも伝えてもらえることにも大きな意義があります。そもそも現在は小学校の先生方からの要望が強いことから、小学校が中心となっていますが、要望次第で中学や高校も対応したいと考えていることを伝えました。

さらに、参加者からの提案として、高校教育で科学や数学、理科教育を重視する文部科学省指定の「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）」制度が挙げられました。プラスチックの研究活動との親和性の高さや環境問題の研究に興味を持ってもらう重要性などから、SSHと協定を結べばより発展的な取組みになるのでは、という提案です。こうした建設的な意見の数々に、プラ推進協の面々もまた、熱心に耳を傾けていました。

## プラスチックや環境配慮パッケージに関する疑問を解消

質疑応答の後、セミナーでは消費者からのよくある質問についても説明がありました。

「生分解プラスチックを使えばいいのでは？」という問いについては、生分解プラスチックとバイオマスプラスチック、それぞれのメリットとデメリットを解説。石油由来と比較して同等の機能性を維持

できるバイオマスプラスチックでは石油資源使用量や CO<sub>2</sub> 排出量を削減できるものの、廃棄物問題の軽減にはならないこと、生分解プラスチックの利用は、容器包装の機能や品質の低下や分解条件のコントロールが難しいといった課題があるとの説明もありました。

また、「全部リサイクルすればいいのでは？」という質問も多いものの、必要となる機能に応じてさまざまな種類が使われているプラスチックのパッケージからパッケージへのリサイクルが難しい現状が伝えられました。さまざまな種類のプラスチックで作られた容器包装が混ざる現状のリサイクルは、機能性や汚染の恐れといった観点から、食品用パッケージでの使用は課題が大きいです。

ほかにも、プラスチックの分別ルールが市町村によって違う理由について、廃棄物処理のインフラシステムが異なることが示されるなど、プラスチックをめぐる消費者目線での疑問に向き合う姿勢が見られました。

## 『プラっとサーチ』の発展に高まる期待

最後に、プラ推進協・専務理事が「プラスチックの容器包装については、どんどん資源循環させていきましょうという流れに変わっています。今一度、足元からリサイクルについて理解し、より良い資源循環をできるよう、我々も勉強を続けて皆さんに情報を発信していきたい。皆さんからの知恵も拝借できればと思います」と挨拶を行い、オンラインセミナーの全工程は終了しました。

今回のセミナーについて、終了後のアンケートでは、多くの方から「満足」との評価が寄せられています。

・今回のセミナーによって、各社が環境問題へ率先して取り組んでいることを知った。これまで『プラっとサーチ』を知らなかったけれど、理解が深まったことで、いろんな企業・団体の取り組みを知ることができた。これからも『プラっとサーチ』の活動をもっと広めてほしい。

・『プラっとサーチ』の検索画面がとても使いやすく、一目でいろいろな情報が読み取れる上に複雑ではないのが良かった。

・プラスチック製の容器包装の生産過程や商品のパッケージング過程のビデオを共有してもらえると、さらに魅力的で面白くなると思う。

・今回のセミナーや活動は、非常に意義があると感じた。また、長期的に取り組むべきプロジェクトだと思う。将来的には、子どもたちの教育ともっと結びつけて、子どもたちが幼い頃から環境への関心を持ち、リサイクル資源の利用について考えるようになると良いと考えている。

といった声が寄せられました。

プラ推進協では、今後も市民や学生への講演活動や勉強会などを通じて、消費者の目線を大事にした上で『プラっとサーチ』の周知や有効活用に努め、環境配慮や資源の循環の認知・理解促進を進めていきます。